



元外交官

佐藤優×山内昌之

東京大学名誉教授



「トランプをなめるぞ、ひどい目にあって」

世界の力関係が激変する

佐藤 11月10日、沖縄の翁長雄志県知事は会見でトランプの当選について、「期待しつつ注視したい」

と述べました。翁長知事は来年2月にワシントン訪問を予定していますが、そこでトランプとぜひ会

いたいと考えているのです。当選からわずか1日で、トランプが日本の外交戦略に大きな影響を与えていることが明らかになっています。

日露関係にも変化が現れるでしょう。トランプの政策によって、アメリカが「世界の警察」の位置から去れば、北方領土交渉は、安倍総理にとつ

ていい方向に向かうと思います。山内 マイケル・フリントというアメリカの元国防情報局長が今年、日本に

来たときに、日露接近に理解を示す発言をしていたようです。彼はトランプ外交のブレーンですが、北方領土問題をめぐり、現在の日露交渉を否定しなかったというのです。こうした発言に見られる通り、トランプの登場によって、日露関係、米露関係は変化するでしょう。

がかかっていたからだと思えます。ひとつは、「トランプに勝ってほしくない」というバイアスです。山内 日本の多くのメディアはそう思っていたでしょうね。

佐藤 もうひとつは、日本が、ワシントン・ポストやニューヨーク・タイムズ、CNNなどアメリカのエスタブリッシュメントがメディア、そしてシンクタンクを經由して情報を得ていたということ。彼らは「反トランプ」のバイアスを持っています

日露関係は大転換を遂げる

から、それが影響しています。つまり日本人は、「ケリントンに勝ってほしくない」と思っていた勢力とばかり接していた。それは、既存の秩序が続くことを望む人々、つまり、ウォール・ストリートの金融資本、アメリカの大手メディア、EU諸国、韓国などです。

一方でトランプを歓迎するのは、既存の秩序を変更したいと願う国々。ロシア、中国、北朝鮮などです。日本にはそうした国の言語へのアクセスを持つ人々が少ないがゆえに、トランプが愚鈍な候補であるかのようにカリチュアライズ(戯画化)されてしまったのです。

では、エスタブリッシュメントの間で、「人種差別的な発言をしない」といった建て前が維持されてきましたが、今回の選挙では、この建て前、そしてそれを重視するエリート層が完全に否定されてしまったのです。

もちろん、他国との関係や安全保障政策についても、構図が変化してきます。しかし、日本の知米派やメディアは、依然として、日米安全保障条約からすべてを説く古典的な世界観に立っている。そもそも、日本でトランプ大統領の当選を予想できた人はほとんどいませんでした。

佐藤 トランプは、非常に強かで有能な人物であるにもかかわらず、あなたも無能な人物であるかのように描かれてきたことが原因でしょう。

これは、日本でトランプに「二重のバイアス」



あの暴言は戦略だった

山内 大筋でそうだと思います。しかし実際はトランプは決して愚鈍というわけではなく、着実にアメリカ人の心をとらえていました。

彼は、アメリカの発展の歴史の主流にいた白人の中間層や、貧困に落ち込んだ労働者層の怒りを適切にすくいあげた。こうした層は、これまで不満を溜めてはいたものの、選挙に向かうことはありませんでした。今回、トランプがそうした思い

の「はけ口」となったと思えます。

佐藤 まさにそういう構図だったと思います。

山内 トランプは、自分の支持者が親近感を抱くような卑語や俗語を交え、人種差別など過激な表現を駆使し、彼らの不満を一気に取り込みました。同時に、イスラム教徒の存在を否定するような「本音」も歓迎された。

アメリカのエリートとというのは、本音と建て前を使い分けられます。これま

1980年代に、アラブ・ブルームという哲学者が、「アメリカン・マインドの終焉」という本を書き、アメリカ人の良識が失われていると指摘しましたが、今回の選挙は「第二のアメリカン・マインドの終焉」と呼ぶべき事態ではないでしょうか。トランプは旧時代の終焉の空気を肌で感じていたのでしょうか。

佐藤 「第二のアメリカン・マインドの終焉」、事態を的確に表したことですね。

マルクスの用語を使えば、トランプを支持した人々は、「ルンペンプロレタリアート(ルンペンロ)」と呼べると思いま

トランプが 世界経済をぶっ壊す

山内 それだけ、いまのアメリカはクリントンを受け入れられなかったという事です。弱者の味方のふりをして、本当は大企業から大金を受け取っているのでは？」

佐藤 そのとおりですね。「アメリカファースト」と言うのと、「アメリカがトップに立つ」と思われそうですが、むしろ反対。中国は「中国ファースト」で、ロシアは「ロシアファースト」で、それぞれが自分の領分でやっつけていこうという発想なのです。

山内 それで、アメリカは「世界の警察」の位置から外れていく、と。佐藤 私が「アメリカファースト」という言葉を考える際に重視するのは、ラインホルド・ニーバーという神学者です。ニーバーは「光の子と闇の子」という著作のなかで、「善と悪」の二項対立的な世界観を提示し、アメリカの指導者層に影響を与えてきました。つまり、アメリカが「光」「善」の側に立ち、「闇」を駆逐しなければならぬという発想です。



トランプタワーは成功の象徴

山内 その意味で、2016年11月8日の大統領選は、アメリカ史と世界史を画する日づけとして、将来振り返られるかもしれません。

山内 アメリカはクリントンを受け入れられなかったという事です。弱者の味方のふりをして、本当は大企業から大金を受け取っているのでは？」

山内 今回の場合も、FBIがクリントンのメール問題は看過できないとして捜査に着手したら、妨害を受けたのでしょうか。そこで、FBIは「クリントンが大統領になつては困る」と思い、わざと大統領選直前で捜査を打ち切った。国民からは「オバマ政権が圧力をかけた」と見られます。

山内 山内 今回の場合も、FBIがクリントンのメール問題は看過できないとして捜査に着手したら、妨害を受けたのでしょうか。そこで、FBIは「クリントンが大統領になつては困る」と思い、わざと大統領選直前で捜査を打ち切った。国民からは「オバマ政権が圧力をかけた」と見られます。



FBI長官のジェームズ・コミー氏

山内 トランプの選挙戦で団結しよう」などとそれまでどうってかわった発言でした。彼が、実は戦略的に暴言を吐いていたことが見て取れます。

山内 一方でクリントンは、これまでの古典的な定石にのっとり、共和党が強力な地盤を持つ州には、積極的に向かおうとはせず、票を勝ち取ることができなかった。

山内 今回、クリントンには不甲斐ないものがありましたね。

佐藤 はい。クリントンに關しては、健康面の不安という弱みもありました。疲労によって声が出なくなる、体調不良から膝をついてしまうといった姿を公衆にさらけ出すまいとして、精力的に動くことができなかった面があります。

「アメリカ第一主義」の真意

佐藤 加えて、宣伝も上手でした。これは池上彰さんがおっしゃっていたことですが、トランプは「看板」をうまく利用し

山内 トランプの選挙戦で団結しよう」などとそれまでどうってかわった発言でした。彼が、実は戦略的に暴言を吐いていたことが見て取れます。

山内 一方でクリントンは、これまでの古典的な定石にのっとり、共和党が強力な地盤を持つ州には、積極的に向かおうとはせず、票を勝ち取ることができなかった。

山内 今回、クリントンには不甲斐ないものがありましたね。

山内 何よりトランプは、プーチン大統領に好感を抱いています。トランプがビジネスマン時代に、プーチンが自らトランプに手紙を出し、トランプ

側も公の場で彼のリーダーシップを讃えています。しかもビジネスでのつながりもある。トランプは不動産、ホテルの運営、ゼネコンなどで稼いでい

ますが、こうしたビジネスをロシアで展開するにあたって手を組んできた、アゼルバイジャンのアガラロフ親子という富豪は、モスクワの権力筋とも強いつながりがあり

ます。
佐藤 こうしたなかで、日本も、これまでのままの外交姿勢をとつてはいられない。新たなルートに見合うだけのインテリジェンスを身に付ける必要があります。